

子どもとのコミュニケーションを考える

新しい年がスタートしたと思ったらあっという間に3月になってしまいました。時の流れるのは早いと言いますが、お子さんの育ちを追跡させていただいていると、本当にそう感じてしまいます。赤ちゃんだった子どもたちが、けっこう自己主張するようになり、様々な課題をややすとこなしています。成長を実感させられています。

さて、私たちがお子さんの成長を実感することの一つに、コミュニケーションの変化があります。幼児期の観察のときには、こちらが説明していることが分かったのかなと聞いてみても、コックリとうなずいたり、微笑みながら「うん」とだけ応えていたりしていた子どもたちが、小学生になると、質問をきっかけにいろいろと自分の事を話してくれるようになります。話したくてしかたないようで、ずっと学校の事を話してくれるお子さんもいます。おうちでもそうなのではないかと想像してしまいます。

でもこのような中で、コミュニケーションがうまくとれないことが起きたりしないでしょうか。会話している途中で、「そんなこと言っていないし〜」などと言って気まずい空気

が流れたり、子どもがぶいとそっぽを向いてしまったりすることがないでしょうか。お母さんたちからも、どうも子どもが私の話を聞いてくれない、うまくコミュニケーションできないのですが、などと相談を受けることがあります。

実はこのようなやりとりがうまく行かないとき、私たちが無意識にやっちゃっている行動が原因になっていることが多いのです。例えば、子どもと話をしている、お母さんが聞き出したことにだけに注意が向いていて、それ以外の事を言っても聞き飛ばしているとか、他の事を考えながら聞いていて「はっと気づいたら」何を話していたのか分からなくなっているというようなことがよくあります。私もそのようなのですが、聞き直すのも、と思ってあいまいなまましておく、と、どんどん話がそれていってしまうことになってしまいます。

コミュニケーションというものはなかなか難しいものですが、質問をする側が少し注意して聞いてあげるだけで、ずいぶんと変わってきます。これからお子さんはどんどん能力が高くなっていきます。お母さんに伝えたいことも複雑でたくさんになります。そのような点を少し意識してみるとよいかもしれません。

研究統括からのご挨拶 ニュースレター平成25年度春号よせて 研究統括 河合 優年



河合 優年

厳しい冬の寒さも終盤を迎え、日差しのなかに春を感じるようになってきました。皆さまどのようにお過ごしでしょうか？ご協力いただいている方の中には、この3月に卒園式を迎える最終グループのお子さまがいらっしゃいます。これで、4月からはご協力いただいているお子さまの全員が小学生になります。また、三重県で先発グループのお子さまは小学4年生になります。

日本ではこれまで、私どもの研究のように、多くの質問項目や観察を含めた乳幼児期からの追跡研究はありませんでした。これまでの研究で蓄積されたデータを含め、今や研究そのものが国の宝物になってきています。

私たち研究グループは、できればこの先もお子さまの育ちを追跡したいと思っています。ご協力いただいている「すくすくコホート三重」「武庫川チャイルドスタディ」は平成25年度(平成26年3月まで)で大きな節目を迎えます。この研究が継続できるよう、来年度(平成26年4月から)の研究については、現在、国に新たな研究の申請手続きを行っています。

この研究は皆さまとともに育っています。昨今の研究予算削減の中で、私たちが厳しい状況に置かれていますが、この研究の意義が広く世間に認められるようこれからも努力するつもりです。引き続きご協力いただけますよう、どうかよろしく願いいたします。

今後の予定とお知らせ

今後のスケジュールについて

皆さまにご協力いただいている「すくすくコホート三重」「武庫川チャイルドスタディ」は平成25年度(平成26年3月まで)で現在受けている国からの研究補助が終了します。研究グループとしてこの研究が継続できるよう、来年度(平成26年4月から)の研究について、現在新たに研究申請手続きを行っています。6月ごろには最終的に決定しますので、詳細が決まりましたら皆さまにご報告させていただきます。

また、転居などでご住所や連絡先が変更になった方は、お手数ですが各研究グループへご連絡ください。遠方へ転居の場合も質問票のみでご協力を継続していただけると幸いです。引き続きご協力くださいますようよろしくお願いいたします。

武庫川女子大学子ども発達科学研究センターのホームページができました！

ホームページでは、これまでのすくすくコホート研究の紹介を行っています。ぜひご覧ください。

武庫川女子大学子ども発達科学研究センター HP

<http://childstudy.jp>



編集後記

今回のニュースレターでは、これまでとは違った内容を盛り込み、三重研究グループと武庫川女子大学研究グループのグリープリーダーによる対談を行いました。これまで、三重県と兵庫県の別々の地域で調査が行われてきましたが、ふだんのように研究しているか？どのような考えで研究を続けているか？といった疑問をリーダーの山本初実と河合優年に聞きました。いつもとは違った側面からこの研究をみなさまにお伝えできればと思います。

【すくすくコホート三重】

〒514-1101 三重県津市久居明神町 2158-5 三重中央医療センター 臨床研究部内
TEL: 059-259-1211(代)

【武庫川チャイルドスタディ】

〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46 武庫川女子大学 子ども発達科学研究センター
TEL/FAX: 0798-45-9880 Email: info@childstudy.jp



Japan Children's Study

この研究は文部科学省の日本学術振興会 科学研究費補助金(課題番号 21243039)から研究支援をいただいています。

平成25年度 研究活動ご報告

すくすくコホート三重

三重では昨年の夏休みに小学2年生 106名の行動観察を行いました。年長から約2年ぶりにお会いするお子さまはみんなすっかり小学生らしくなっており、その成長ぶりにスタッフ一同喜んでおりました。そのうち103名の方は約90分の知能検査(WISC-III)と、30分の行動観察というハードな内容でしたが、難しい知能検査も最後までがんばって受けてくれ、観察も楽しく話したり運動したりしてくれました。特に最後の紙風船でのバレーボール(?)はみんな興奮し、白熱した戦い(!?)となりました。スタッフも日頃の運動不足を解消すべく、重い身体を引きずりながら奮闘しました。実は、バレーボールの部分は観察の項目で

はなくおまけだったのですが、子どもたちはみんな一番楽しんでくれていましたね~(笑)。

NICU卒業生の方は、年長のみなさまに6歳の観察を行いました。年長になるとぐっと一人前になって、いつでも小学校に行けそうな雰囲気でした。いろいろな説明も上手にしてくれ、「じっと待つ」ということもしっかりできるようになってきています。

小学1年生のみなさまには春と秋に郵送による就学後調査を実施しました。来年度もこの研究が継続できれば、ぜひ小学2年生の夏休みにお会いしたいと思っています。

武庫川チャイルドスタディ

武庫川チャイルドスタディでは、今年度小学1年生になった約30名のみなさまへ郵送の就学後調査を春と秋に実施しました。来年度もこの研究が継続できれば、ぜひ2年生の夏休みに武庫川女子大学の観察室でお会いしたいと思っています。

年長グループのお子さま約20名は6歳の観察を行いました。これで、ご協力いただいている方全員が、この春小学生になられます。みなさまのますますの成長をスタッフ一同楽しみにしています。



平成25年度
春号

すくすくコホート

ニュースレター



すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

こんなことがわかっています。

■ すすくくコホート活動レポート ■

5・6歳での「同じもの探しゲーム」にみえる傾向

三重中央医療センター 山川紀子先生

お子さんが5歳、6歳の時に、パソコンを使って「同じもの探しゲーム」*をしたのを覚えていますか？その課題はいろいろな絵や図、人物の写真が次々に出て来て、6つの似たような選択肢から出てきたものと同じものを探し出し、画面をタッチして回答するというものでした。その結果について興味深い傾向がみられました。

課題は全部で29個あり、いくつかの種類に分けられます。それは、絵（人物、物）、図形、人物写真といった材料の違いと、選択肢の間違い部分のパターンの違いということで分けられます。選択肢の間違いというには2種類あり、1つは、絵の外側の形が違うもの（外形変化課題）、もう1つは絵の外側は同じで、内部が違うもの（内部変化課題）です。人物写真ならば、外形変化課題は髪型が変わるといったもの、内部変化課題は顔にほころが付いているといったものになります。このような課題のパターンの種類によって、回答の傾向に違いがあるのかどうかを検討しました。今回検討したのは、①絵の外形変化課題、②絵の内部変化課題、③人物写真の外形変化課題、④人物写真の内部変化課題の4種類で、正答率と、最初に画面にタッチするまでにかかる時間を比較しました。

すると、全体的に5歳でも6歳でも女の子の方が男の子よりも正答率が高く、最初にタッチするまでの時間が長いことがわかりました。つまり、

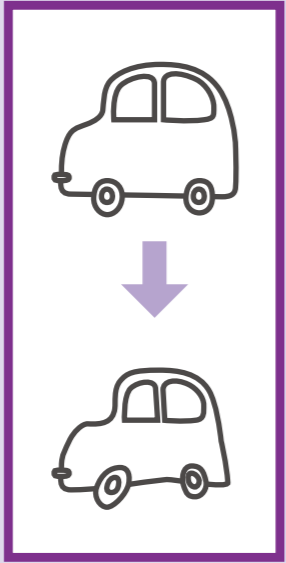
男の子はどちらかというと簡単にパネルを押して間違えると何度も試行錯誤するのに対して、女の子はじっくり考えてから少ないタッチ回数で正解に達する傾向があるということがわかりました。

また、正答率に注目すると、多くのお子さんでは、③人物写真の外形変化課題の正答率が最も高く、④人物写真の内部変化課題、①絵の外形変化課題、②絵の内部変化課題の順に低くなります。つまり、パッと絵や人物写真を見た時に、絵の内部よりも外側の形が違う方が気づきやすく、絵よりも人物写真の方が違いに気づきやすい、というように言えるでしょう。一方で、どの課題に対しても正答率が変わらないお子さんもいました。つまり、絵や人物写真といった材料や、外側の形や内部といった違った箇所に関係なく、同じように違いを見つけられるということです。

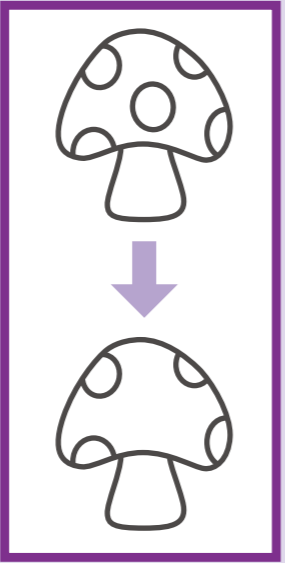
このような特徴の違いは、実際の生活場面でどのように情報を仕入れてくるか、ということに影響を与えるかもしれません。現在、これまでみなさまにご協力いただき蓄積されたデータとの関係を調べています。この課題に見られるような、それぞれのお子さんの特徴をつかみ、毎日の生活の中でお子さんの力をうまく伸ばせるような関わり方のコツをお伝えできるようにすることがわたしたちの新たな目標です。



* パソコンを使った「同じもの探しゲーム」(三重県尾鷲市では装置がないため残念ながら行っておりません)



絵の外形変化課題の例



絵の内部変化課題の例



河合優年 (武庫川チャイルドスタディ)

三重県での「すすくくコホート三重」、兵庫県での「武庫川チャイルドスタディ」は研究メンバーもほぼ入れ替わることなく、ご参加いただいている協力者の皆さまとともに調査を続けてきました。これまで欧米では国家的研究として子どもの大規模な追跡研究がなされてきましたが、日本でこのような研究はされていませんでした。日本での追跡研究として、まずは研究スタート時の苦労などがありましたら教えてください。

【山本】すすくくコホート三重では三重中央医療センターと尾鷲の総合病院で観察室を大変で苦労しました。この交渉は今から思うと大変でしたが、これから始まる観察や研究を想像すると楽しみでもあって、もう一回やってみると言われたら苦労してでもまたやれる自信はありますね。それほど、この研究には意味がありましたし、僕にとって宝物のような存在になっています。

【河合】兵庫県での研究が三重県と大きく違う点は、三重県では医療機関である病院(小児科・産科)がベースで協力者を集めるネットワークがもともとできていました。兵庫県では大学(武庫川女子大学)で行うため、病院のようなネットワークがなく、BCGなどの予防接種のときに保健所で協力してくれる方を募りました。最初に研究スタッフから声をかけられたお母さんはちょっと驚かれたかもしれませんが、しかし、みんな何かできることがあれば手伝ってあげようというボランティア精神の高い方が集まり継続してくれました。そのような温かい気持ちがあれば研究をスタートし、継続することは叶わなかったと思います。そういった点で協力していただいている皆さんにとっても感謝しています。

子どもの育ちを追う追跡研究はとても長い

年月がかかります。このような長丁場での研究を続けてきてよかったことはありますか？

【山本】これまでは小児科医として、主に病気のお子さんを診察し治療してきましたので、この研究を通して心身共に健康なたくさんのお子さんに出会い、観察を通して病院では見ることの少ない健康な子どもを10年という長い期間にわたって観させていただけました。このような経験はたいへん貴重でした。

また、この研究を通して、お子さんの身体所見を診るに加え、心を見るということの大切さをより深く学んだと思います。

【河合】この研究は早い人で4ヶ月からスタートしましたが、自分の子どもでさえ4ヶ月からしっかりと観ることはなかったのに、協力者のお子さんたちが成長して変化していくのを小学校までしっかりと見続けられたことは研究者冥利に尽きることだと思っています。研究を通してずっと一緒にいてくれるお母さんや子どもがいてくれた、また研究チームとしても山川先生や難波先生が一貫して同じ子どもたちを見続けてきてくれたことが一番うれしいことですね。

長い期間の研究で得られたデータは膨大であり、また貴重なものですね。武庫川女子大学ではこれらのデータ分析を行っていますが、このデータを今後どのように生かしていきたいですか？

【河合】この宝物のようなデータは、次に研究を進めていく世代の人にとって、いろんなモデル(これとこれが関係しているというガイドライン)となるでしょう。もしもこの先の研究をしようとしたときに、今までみんなやってきたこの成果に基づいて、ゼロからのスタートではなく途中から進めていくことができます。私たちが到達したところよりも少し先へ進んでもらうこ

すすくくコホート グループリーダー対談



2014年1月のまだ寒さも厳しいころ、三重県津市にある三重中央医療センターにて、「すすくくコホート三重」代表の山本初実先生と「武庫川チャイルドスタディ」代表の河合優年先生による研究グループリーダー対談を行いました。

とができるのではないかと考えています。できたらこの先も、中学や高校へ行ったとか、結婚したとか、子どもたちがどういうふう成長したのか教えてもらえるとうれしいと思っています。

では、研究はまだ続くということですか？

【河合】皆さんさえよければ、続けたいですね。そうすると日本だけでなく世界的に意味のあるデータになるでしょう。この研究は平成25年度が節目となり、平成26年度以降の研究計画は現在、国に申請中です。認められるかどうかは6月頃に結果がわかりますので、わかり次第お知らせさせていただきます。ご協力者の皆さまにはぜひ継続してご協力いただけるとありがたいです。

三重県ではこの研究が社会に還元されたところはありますか？

【山本】この研究の成果を社会実装することは強く望まれていたところです。三重県では、早く生まれたお子さんたち(NICU児)のフォローアップ研究事業に繋げていくことができ、社会のなかでこの研究の成果が生かされているのを実感しています。子どもの育ちを大切に見守る事業として地域で発展しつづけたらいいですね。

ふだんは三重県と兵庫県という離れた場所で研究していますが、どんなふう連携しているのでしょうか？

山本初実(すすくくコホート三重)



この研究は「社会性の発達」というものをメインテーマとしています。「社会性の発達」とはひとことでのどのようなものだと考えていますか？

【山本】"adaptation(適応)"だと思います。いろんなことに適応できるかどうか。社会性が発達するということはだんだん慣れてくるということだと解釈しています。そして、適応には適切な環境が必要だと考えています。通常、他の動物の赤ちゃんは自分の命を守るために生まれてすぐに立ち上がり歩くことができますが、人間の赤ちゃんの場合は、おすわり→ハイハイ→立つまでに1年程かかります。ゆっくりと発達してもよいような守られた環境にあることが一因かもしれません。しかし、過保護に守りすぎると今度は適応しにくくなるようにも思います。親というものは子どもに適切な環境を提供しなければならないと思います。

【河合】どこからそんな素晴らしい言葉がでてくるのでしょうか(笑)

【山本】共同研究というのはときに難しいもので、私の経験では、全く同レベルの知識を持っていると、かえって競合してしまい、うまくいかないことがあるように思います。相手の分野では少し低い知識レベルであると、教え合える専門的な部分があり、互いに助け合うことができると思うようになります。私たちが10年もの長い期間、いっしょに研究しつづけている秘訣ですね。

【河合】ここでは小児科学と心理学という領域架橋になりますが、研究構造的にも大きな課題を持ったチャレンジングな研究でした。同じ言葉であっても分野が異なると全く違う意味で使われることがあるというのは、研究の世界ではあちこちで聞く話です。私たち研究者は異なる領域との通訳だけでなく、一般の皆さんとの通訳ができなければならないと思います。

私が考える社会性とは、外界とのやり取りの中で、他者の存在を認めながら自分の

快適さを作り出すことができる能力だと考えています。

最後に、この研究を通してわかったことは何でしょうか？まだ論文になっていないこともありますが、皆さんにお伝えしたいことがあればお願いします。

【山本】三重研究グループの山川先生のもとめた解析結果ですが、以前ニュースレターで“夫(や周囲)のサポートがあるとお母さんの子育てのやりやすさが上がる”という記事を紹介させていただきました。一方で、現在、子育てのアドバイスを身近に求める人が少ないお母さんの育児環境が指摘されます。病気とは思えない子どもの仕草が何かの大病の症状かと気になって病院を受診する方がありますが、昔はおじいさんやおばさんがいて、近所の人にも簡単にアドバイスを得られる状況にあったのが、現在は核家族化が進みそれが難しくなっています。このような社会の子育て支援の変化が山川先生らの検討結果で浮き彫りになっているように思います。やはり大勢の大人で子どもの育ちを見守っていくような環境が大切だと思います。

【河合】私からは子どもとのやりとり(受け答え)のタイミングについてひと言述べたいと思います。昔から「目を見て話さないと言われたりします。うわの空で相手の対応をしたり、相手側が何か言おうとしたときにかぶせるように「そうそうそう」と言って返答のタイミングを外したり、一生懸命説明しているのにそのときは何も返事しないで忘れたところに話をはじめたりすると、子どもでなくてもちょっと会話のリズムが崩れたりします。少しわかってきたことですが、このようなやり取りのタイミングが人と人とのコミュニケーション、ひいては社会性と関係しているのではないかと思います。